

# 高校授業料無償化「除外」で揺れる 「朝鮮学校」を訪ねる。

拉致被害者の「家族会」事務局長だった蓮池透さんは最近、家族会と距離を置き、「制裁一辺倒」の運動に疑問を呈するようになった。

経済制裁はそれ自体が目的ではなく、あくまでも救出のための手段であるという位置づけであるべきです。それが一部、経済制裁が目的化しているように感じられるのは非常に残念なことです（「奪還 引き裂かれた二十四年」新潮社より）

蓮池さんは、日朝交渉の行き詰まりの背景に「北朝鮮の体制打倒を主目的とする人たちの影響があるとしたら、それを一刻も早く克服しない限り、拉致問題を解決する展望も生まれません」とも指摘する。

日本はこれまで、外交交渉ではなく「圧力」に重点を置き続けてきた。しかしそれで拉致問題の解決が進んだかといえば、何も変わらなかったではないか

蓮池さんの言葉だけに、その指摘は重い。

しかし、日本ではいまだに「制裁を強化すべし」との感情論が根強い。

この2月、中井洽拉致問題担当相は4月から実施予定の高校無償化に関し、在日朝鮮人の子どもたちが学ぶ朝鮮学校を対象から外すよう文部科学相に要請した。

拉致問題を解決する手段として、日本に生まれ育った在日3世・4世の子どもたちを「人質」にすることは、妥当なのだろうか。

朝鮮学校排除の理由として「教育内容を確認したい」との説明もなされている。

だが、朝鮮学校は地方自治体からの各種学校認可や助成金手続きの際、必ずカリキュラムを提出してきた。けっして教育内容を秘匿してきたわけではない。

現在、日本のほとんどの大学が朝鮮学校卒業生の受験資格を認めているのも、朝鮮学校が日本の高校と同水準のカリキュラムを持っていることを認めているからである。

朝鮮学校をめぐる議論が朝鮮学校の実態を見ずに、先入観で行われていることはないのだろうか。

そこで私は、横浜にある神奈川朝鮮中高級学校（中学・高校に相当）を訪ねることにした。

## 朝鮮高級学校を訪ねる

神奈川朝鮮中高級学校は横浜駅から歩いて10分ほどの高台にある、神奈川で唯一の朝鮮高校だ。

創立は1951年。いままでに5000人を越える卒業生を送り



▲朝鮮高級学校

出してきた。映画「フラガール」の李相日監督も、この学校の卒業生だ。

現在は、中・高あわせて230名ほどの生徒が学ぶ。

「朝鮮学校」というと、生徒はみな在日朝鮮人の子どもたちと思いがちである。ところが、私がお会いした姜文錫カンモンソク校長先生からは意外な答えが返ってきた。

「生徒の半分以上は、『韓国籍』なんですよ」

朝鮮半島が南北に分断されていることを反映して、日本に住む在日コリアンの身分も「朝鮮籍」と「韓国籍」とに分かれている。

必ずしも単純にはいえないが、このうち朝鮮民主主義人民共和国につながるのは「朝鮮籍」の人々だ。

一方「韓国籍」は、“北”とは対峙する大韓民国の在外公民ということになる。だが韓国籍であっても、民族の文化を学ばせたいと、朝鮮学校に子どもを通わせる家庭も少なくないのだという。

もちろん「朝鮮籍」も多いが、中には日本国籍を持つ生徒もいる。両親が国際結婚というケースもある。

「このごろは中国籍もいるんですよ。中国の朝鮮族の生徒です」と校長先生は笑った。

「“北朝鮮”の学校」と思われがちな朝鮮学校は、国籍に関する限りは在日コリアンのインターナショナルスクールの様相を呈しつつある。

生徒たちの多くは、いまや在日4世が大半だという。日本で生まれ、日本の文化の中で育った生徒たちだ。

ふだんは日本のテレビを見て、日本の音楽を聴き、日本の社会で暮らす普通の高校生たちである。

「バンクーバーのとき、生徒たちはキム・ヨナと浅

田真央のどちらを応援したんですか？」と聞いてみた。

「もちろんキム・ヨナの金メダルには大喜びでしたが、浅田真央もみな応援していましたよ」と校長先生。

このエピソードにこそ、朝鮮高校に通う生徒たちの姿が端的にあらわれているのかもしれない。

「日本人」「朝鮮人」といっても、単純に二分できるものではない。

在日の生徒たちのほとんどは、おそらく生涯を日本の社会の一員として過ごすだろう。生徒たちにとって、日本と朝鮮・韓国のどちらもが「ふるさと」なのだ。

「私たちの学校の教育目標は、日本に住む朝鮮人として、日本の社会と在日コリアンのコミュニティの両方に奉仕することのできる生徒を育てることです」と、姜校長先生は話してくれた。

## カリキュラムは日本の高校に準ずる

教室を見せていただくと、高校2年生のクラスでは英語の授業中だった。



チマチョゴリを着た先生が流暢な英語で授業を行っていた。

▲英語の授業風景

教科書はハングルで書かれている。授業は、理科や数学でも基本的には朝鮮語で行われるのだ。

すこし不思議な光景だったが、生徒たちの様子は普通の高校生と変わらない。

「英語の尹先生は、藤沢から通っているんですよ」と校長先生が教えてくれた。生徒にも、藤沢から通学してくる者が何人かいるという。もし無償化除外となれば、その影響は藤沢市民にも及ぶのだ。

「学校のカリキュラムは、基本的には日本の高校と同じです。ただ、『国語』と朝鮮の地理・歴史がそれに加わります。」

この場合の「国語」とは、朝鮮語のことだ。日本の「国語」に相当する科目は、「日本語」と呼ばれる。

「朝鮮学校では共和国賛美の『反日』思想教育を行っている」という人たちがいる。

たしかに校内には、金正日総書記と故金日成主席の肖像が今でも飾ってあった。

かつて冷戦時代には、朝鮮学校が共和国の色の濃い教育を行っていた時代があったことは事実だろう。

しかし朝鮮学校自体が様変わりした今では、特別な教育を行っているわけではない、と姜先生は言う。

「『反日教育』という人がいるけれど、何をもって『反日』というのでしょうか？ もちろん、植民地支配の歴史は教えます。それは事実なのでから。」

でも、生徒たちはこれからも日本の社会で生きてい

くのです。『反日』教育などして、どうなるのですか。

私たちは過去の歴史をふまえて、これからどのように共生するかを考えたいのです。

私たちはいつでも学校を公開しています。どうぞ事実を見に来てください。」

姜先生は、この時だけは少し語気を強めた。

## ふたつの「制服」

朝鮮学校では、拉致問題をどう扱っているのだろう。

「私たちは拉致問題についても話します。悪いことは悪いことですから。でも、生徒たちも、とてもつらい思いをしているんです」と、校長先生はいう。

校内では、男子生徒はブレザーだが、女子は朝鮮の民族服のチマチョゴリを着ている。

「昔は、みなチマチョゴリの姿で通学もしていました。でも、何かあるたびに子どもたちが嫌がらせを受けたり、暴言を浴びせられたりするんです。」

刃物で切られたチマチョゴリを見たときは、本当にショックでした

だから生徒たちを守るために、今では通学用の『第二の制服』をつくり、学校でチマチョゴリに着替えることにしたんです」

姜先生は、悲しそうだった。

「どうして私たちが朝鮮人だということを隠さなければいけないのですか！ 私は変えたくありません！」と、通学服の変更に反対した女生徒がいたという。

彼女たちの“民族への誇り”と、少女に罵声を浴びせる日本人（中年男性が多いという）の心根の卑しさ。

この国の多数派である私たちには、社会的マイノリティ（少数派）がそのアイデンティティを大切にすることを理解することは、難しいのかもしれない。

「生涯を日本で過ごすつもりなら、日本に帰化すれば良いではないか」と、素朴に思う人もいるだろう。

しかし、日本社会には今でも在日朝鮮人に対する根強い差別が存在する。それは、「帰化」したからといって、本質的に変わるものではないのだ。

だからこそ「私は朝鮮人です」と、誇りを持って生きていこうとする人々もいる。それが朝鮮学校の存在の、ひとつの本質なのかもしれない。

朝鮮学校の授業料は月額3万円を越える。諸費用を含めた保護者の負担は、現在でも軽いものではない。

私が訪ねた校舎は至る所が傷み、先生たちが手作業でその補修に追われていた。民族の“誇り”を守るため、まさに自分たちで守り続けてきた学校なのだ。

この学校の生徒や保護者に「制裁」を科すことが、本当に拉致問題の解決につながるのだろうか。